

「病気は恥ずかしくないけど人前で話すのは恥ずかしい。帽子を被ったら照れが和やらいだ」とベレー帽姿で登場した樋口さん。帽子がお似合いで、まっすぐな視線が印象的でした。

「認知症の人には見えない」とよく言われるそうですが、なるほど、マイクを握った凜とした佇まいから、病気で苦しむ姿は影を潜めているようでした。

さて「認知症に見える人」とは、どのような人なのでしょう。

例えば認知症の症状は、火の不始末をする、身だしなみに気を使わない、慣れた道でも迷ってしまう…。進行すると寝たきり、会話が通じないなどが一般的です。こうして見ると、できなくなっていくこと、失っていくものばかりが目についてしまいます。樋口さんの話を聞いて、これは認知症のある一面しか見ていないことを知りました。

勇気を出して受診をしても、医師に「認知症は進行を遅らせることができない病気」「〇年で死亡する」など絶望的な宣告を受けてしまうことがあります。樋口さんの場合は、うつ病と誤診され、その治療で症状が悪化してしまいました。

認知症のイメージが定着し、その実態をよく理解していない医師は少なくない。この事実には驚かされました。

自分自身を振り返ってみても、レビー小体型認知症は「本物と区別のつかない幻覚」という症状については理解していたものの、薬に過敏性があることや誤診が多いことなどは知りませんでした。

樋口さんが強く訴えていたことは「認知症は作られている」「間違っただけのケアが、認知症の人のできることまで奪っている」ということでした。

認知症の人の行動には、そうするだけの理由があるのです。認知症の症状を抑えるという名目で、薬の量や種類を増やすことをする前に、「できること」に働きかけるケアが必要なのだと思います。否定することをやめ、したいことに協力をしていく姿勢が大切と感じました。これにより、「認められている」「必要とされている」という気持ちで、心が満たされていきます。

もう一つ心に残ったのは、認知症と診断されて不安な気持ちで一杯な人に、「大丈夫」と心に寄り添う人の存在の大切さでした。病院の相談員や、同じ病気を経験したボランティアが、その役割を担うことが想定されます。気持ちが受け入れられ、体験者が生き生きと仕事をしていることを知ったなら、どれだけ励みになるでしょう。認知症に限らず、命を脅かす病気の宣告をされた方たちが、安心して本音を吐けたり、相談ができたりする場が、今はまだ十分でないのです。

「症状ではなく Life を見て欲しい」と、樋口さんは言っていました。

同じ言葉を私は、がんサバイバーの方から聞いたことがあります。

認知症を正しく理解している人が増え、安心して病気のことを話すことができる社会をつくることは、他の病気や障がいでも苦しむ方たちが住みよい社会になることにもつながります。そういった意味でも、認知症を学ぶ意義があると感じました。